

保育の本から

## 『保育者の地平』を読んで

松沢 孝博

来るものを受けることによって大人の世界はひろがる——かなり前に読み終えていたのにもかかわらず、この度の依頼を受けた時に、一番にしかも明瞭に浮かんできたのが本書（津守 真著、ミネルヴァ書房、一九九七年）からの一節である。とはいうものの、ほんの一瞬ある種の躊躇が襲ったのである。ところがその躊躇はかつて同じ様な状況における躊躇とは異なっていた。その躊躇は大変小さく、むしろ積極的に受ける思いが生じていたのである。いつもの自分とは異なる思いが、自分の中に生じていることに驚かされ、書き終えた時の自分の広がりを感じつつ進めたいと思ったの

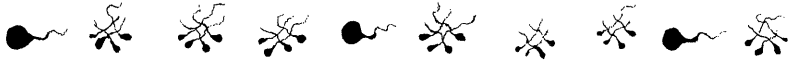


である。それだけでも私の世界は広がったと言えるのかもしれない。

### 保育の原型を見る

「本書は、どんな子どもでも子どもが遊ぶ保育をするのにはどうしたらよいかという長年抱いてきたことへの答えである」と述べられて始まる。しかしそこには、指導、評価、めあて、躰というようなく目にするこぼが出てこないだけでなく、向こう側に子どもをおいて、大人が望む姿を目指して子どもを引っばっていく様子も見ることとはできない。ただ子どもと出会い、子どもに寄り添ってともに生活していく姿がある。その寄り添うことも、大人がしゃしゃり出るような寄り添いではなく、子どもが必要としていることがわかるからこそ、自然になされる行為なのである。しかも、子どもの行為に奇異な感じがしたり、不可解な感じが生じても見放さないでもちこたえるのである。すると新しいかかわりが開けてくる。子どもを信じていることができるがゆえに、子どもとの間でもちこたえることができるのであろう。私などは、教える意識、躰ける意識が勝り、結果的に当然のことをしたぐらいにしか思わないのではないか。

ところで、象形文字でいう保育の「保」という文字は、人が子どもを背負っている姿であったり、寄り添って子どもを守っている姿であるともいわれている。著者の子

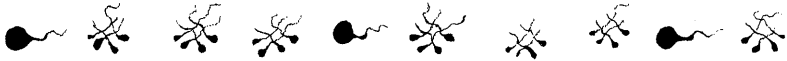


どもに寄り添う姿とダブってしまうが、それは子どもとの空間的距離の問題ではなく、気持ちの距離が近いということであろう。

子どもが、おんぶや大人のそばに居ることを要求する時に、大人が気持ちよくそれに応えようと、子どもは全幅の信頼をよせてそこで過ごす。すると自ら降りるなり、大人から離れて自らの遊びを始めることを多くの場面を通して教えてくれる。確かに、子どもの傍にはいるものの、早く何とか降りたいと考えていたり、上手に子どもから離れる算段を考えていたりすると、むしろ子どもは離れない、自分の遊びを見つけ出すことはできない。

### 子どもとの響きあい

子どもの小さいな行動にも目を向け、その行動の背後にある子どもの気持ちを感じて応えていく。それに対して子どもの方もある時はことばで、ある時はことば以外のからだの動きで応えてくる。そこでは「今」の充実のために最大の努力がなされる。そしてともに喜びの時を迎える。例えば、画用紙を前にした子どもに自動車や犬を描いて欲しいといわれると、すぐにその形を描いて喜んでもらおうとすることはある。しかし、だからといって子どもはそれほど喜びを表わさないことが多い。子どもは、犬や自動車を動きとして捉えていることが多いので、著者は画用紙に犬を曲線で描

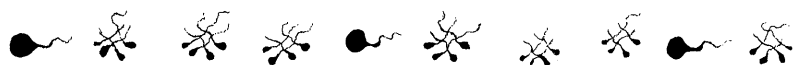


くと、すると、子どもの自らワンワンといいながら紙が破れるまで曲線を描くのである。すると大人と子どもと一緒に喜びの中に入っていく。それがこちらにも伝わってくるのである。

響きあうためには、相手の気持ち（音）を聴かなければならない。自分の気持ち（音）だけを主張していたのなら、騒音になりこそすれ響きあうことはない。それは大人は聴くことができるが、子どもはそれが可能であろうか。今まで私たち大人はそのことに無神経ではなかっただろうか。まして、幼い子ども、ことばをもたない子どもに対してそのようなことはありもしないこととして対応してこなかっただろうか。ほんの小さな表現の中に大きな気持ちが含まれている。それに気づく時に響き合いは可能になるのである。

### 成長すること

子どもを前にする大人は、大人と子どもとの関係を「成長させる―させられる」という図式で見えてしまい、子どもをいかに他の子どもと同じように成長させるかに奔走し、子どもは一律かつ一方的に成長させられる側に終始することが多い。大人を棚上げにして、子どもにうまくいかないことの原因を帰することは余りにも多く見聞きすることができる。時に子どもから教えられたり、気づくことがあって、うれしいと感

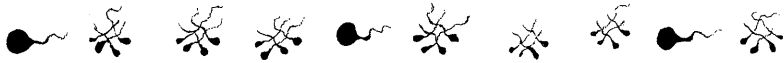


じてもそれはすぐに忘れ去られ、自分が子どもにしてやったことだけを覚えていて、恩に着せたり頑張りを要求したりする。

著者は、「子どもを育てる大人は、子どもと出会い、子どもの表現に応答し、子どもとともに現在をつくり、子どもとの間の体験を省察する。その生活の中で大人は日々学ぶ」と述べている。子どもと出会うからこそ学びであり、大人の成長の糧ともいべきものである。本書から、子どものみならずかわる親、実習生、同僚から学びつつ表現されたものに接する時、自らの傲慢さと学びのかたよりを感じざるをえない。特に大学で教鞭をとるものとして、専門性というみ旗をもってして学生はもちらんのこと、専門の異なる同僚にできえ、自らを上位において相手から学ぶ姿勢を消しさってしまう。かわりあうともどもにとって、成長する機会がいつも身近にあることを、常に留めておきたいものである。

### 生きた学問に向けて

言語の迷路にはまりこんで日常の具体的な生活に力を持ちえない哲学や、客観性を金科玉条のごとく標ぼうして（もちろん主観主義はよしとしないが）なまの具体的な人間を遠ざけた心理学に接するにつけ、何のための学問であるのかと考えてしまう。すでにある方法論から見えてくることは、主体としての人間、自らの意向で生きる人



間が見えてこない。改めて、保育を考え、「私」が直接子どもとかかわろうと、横で見ようとして、「私」がかかわっているの、「私」を含めた現象の理解が大切であると考えている時、本書はタイムリーに示唆を与えてくれているようである。人間は抽象的に生きているのではなく、生々しい具体性の中で生きているのである。今の哲学や心理学が置いてきてしまったことを本書が教えているようである。子どもとかかわりを考えることが、必然的に新たに哲学や心理学を超えたものにならないだろうか。子どもの存在自体が、既成のもので推し量ることのできない未知であり、人間本質に関する無尽蔵かつ豊かなものを持ち合わせているだろうから。

### おわりに

はじめに述べた、自分自身の広がりには得られたのであろうか。

一地方の小さな町においても、人間を対象化して、結果的には物と同じように扱うことが余りにも当たり前になってきている中で、無自覚の内にもそれが日常化していくことに抗するために、新たな勇気を得た感じである。子どもが伝えてくれることにはさやかでもよいから敏感さを持って応え、共に喜ぶ実感を重ねたい。

(四国学院大学)